

重点目標	担当	学校評価実施項目	教職員評価	自己評価と次年度に向けた改善策	学校関係者評価
(1)一人一人の実態を見据えた個別の教育的ニーズに応じた指導・支援の充実を図る	教務部	個別の指導計画について、担任と担当者間で確認する機会を定期的に設け、効果的な活用の推進をはかり、学習指導の向上につなげた。	74	小中学部では評価検討会を毎学期実施し、関わる教員で指導計画を基に協議している。一方、理療科では、理療科部会や職員室での情報交換が主であるため、評価項目と合致しない面があるのではないかと。また、高等部会がなくなったことや、職員室が2つに分かれたため、理療科の授業に入っている小中学部の教員との連携が取りにくくなっているのではないかと。改善策としては、理療科の成績会議に、小中学部の授業担当者が出席できるようにすると情報の共有化が図れるのではないかと考える。特に本科保健理療科は普通教科も多いので効果があると思われる。	1. 情報発信や地域との連携について ・グランドソフトボール、弱視卓球、フロアバレーボールなどの視覚障がい者の競技に健常者を招いて、実際に体験してもらうことで、「見えること」や「見えにくさ」とはどうか、考えてもらう必要がある。福井盲学校では、こうした活動がある。 ・障がいのことについて健常者は気がつかない、健常者の子どもに体験させることは、ユニバーサルデザインを理解させるためにも大切なことである。 ・古江地区では、古江小のひまわり学級での交流や、社会福祉協議会の「あったかスクラム」や「ねっこの会」で、障がい者と高齢者の交流活動を行っている。盲学校もしめ縄作りに参加されているが、交流の輪を広げられると良い。
	生徒指導部	図書館の有効活用のためにデータ管理を行い、利用者に使いやすいものとした。	76	3年がかりで蔵書のデータ化が完了した。デジタイズ図書の出し出し数も増えてきた。利用者の要望に応じてさらに利用してもらいたいようにしたい。	
	保健部	保護者・医療機関・担任等と情報を共有して児童生徒の健康管理を行った。	89	保護者・担任・学部・分掌等と心身の健康状態について情報共有をし、主治医訪問や受診同行をして健康管理を行った。来年度も継続したい。	
	保健部	安全点検や応急手当講習を行い、ヒヤリハット事象をもとに、安全で衛生的な環境づくりができた。	87	・応急手当講習並びに学部ごとの緊急体制研修を実施し、緊急時に全教職員が迅速かつ適切な対応ができるよう研修を重ねた。 ・日々の安全点検と、毎学期の定期安全点検を実施して、学習環境の整備に努めた。 ・校内における衝突事例があった。その対応について、検討する部署を明確にする必要がある。	
	寮務部	保護者や担任との協議により個別の生活支援計画の修正を行いながら、寄宿舎生に対して、より望ましい指導を行うことができた。	74	「個別の生活支援計画」を活用して指導を進めた。必要に応じて、学部会等で伝達を図りながら今後も継続したい。	
	小中学部	個別の指導計画の検討や研修等を活用し、児童・生徒の実態把握、課題確認を行い、一人一人の児童・生徒の将来を見据えた教育を進めることができた。	85	個別の指導計画の目標及び評価の検討を定期的に行い、指導の方向性の確認や授業改善に役立てることができた。各児童生徒の発達段階や生活年齢に応じて、将来を見据えた取り組みをさらに学部全体で実践していく必要がある。	
	理療科	国家試験対策として、個々の生徒の学力向上を目的に、毎週月曜から木曜日まで補習を実施し、受験者全員の合格をめざした。	87	今年度は、放課後を中心にある程度対象者を絞って補習を行うようにした。放課後に教室での自習を希望する生徒もおり、効果的に時間を使うことができたように思う。来年度は、さらに国試合格のために絶対に補習が必要と思われる生徒を絞り込み、効果が上がる体制で臨みたい。	
(2)一人一人の進路の実現に向けた指導や、より豊かに社会で生きる力を育てるキャリア教育の推進を図る。	進路指導部	各学部と連携を図りながら、進路の行事を計画的に行うことで、系統的な進路指導を行うことができた。	80	来年度は『進路指導年間計画』に学部毎の「つけたい力」の視点を取り入れることで、より見通しをもった進路指導を行えるようにしていきたい。理療科の授業で行っている「職場見学・進路講話・ビジネスマナー講座」について、学部での起案とする事を検討していきたい。	2. 教育相談・センター的機能の充実、児童生徒の募集について ・入学にはつながらないかもしれないが、通常学級の授業支援は盲学校のセンター的機能業務として重要である。 ・弱視児童の学習支援だけでなく、日々の生活が向上していくために、生活支援を重視していくことも必要である。 ・地域支援部だけでなく、盲学校の先生たち全てが弱視学級や通常学級に入っていき、一歩先を見据えた環境作りを行うと良い。 ・卒業生の移行支援会議について、非常に綿密になされていると思う。児童の移行支援においては、保護者支援に力を注ぐことも必要である。
	進路指導部	進路開拓パンフレットを作成し、事業所などに本校の情報を提供したり、関係機関との連携を強化したりすることで新たな進路を開拓し、生徒の進路選択の幅を広げることができた。	74	進路開拓パンフレットの認知度が低かったようであるが、事業所や関係機関との会議などでの説明・配布を目的に、今年度初めて作成したものである。生徒の就職先決定や理療科の校外臨床実習先の開拓につながるなどの成果があり、今後も必要に応じて改訂し、進路先開拓に活用していきたい。	
	生徒指導部	児童・生徒の実態や児童・生徒・教職員の意見をもとに、生徒会行事や部活動を充実させることができた。	87	今後も児童生徒の実態に応じ、さらに充実させていきたい。	
	寮務部	異年齢の寄宿舎生どうしが活動する場面をもうけ、年度当初に比べて生活力や社会性を向上させることができた。	72	舎生会等での話し合い活動・余暇活動を通じて、集団における役割と目的、意義を自覚することにつながったと思われる。今後も継続したい。	
	理療科	ビジネスマナー講習により社会人としてのマナーを身につけさせ、施術者としてはアサーション学習を取り入れることによりコミュニケーション能力を向上させることができた。	72	今年度ビジネスマナー講座では、就職先での人間関係の構築を重視し、組織の一員としてのコミュニケーション力のスキルアップに関するものを取り入れた。アサーション学習は、少しマンネリ化した傾向があり、来年度からは、視点を変えて実施することを検討したい。	
(3)専門性を高め、創意工夫した教育実践による授業力・生活支援力の向上を図る。	研究部	専向研を年13回実施し、教職員に対する視覚障がい教育の知識・技術の向上を図り、年度内に「弱視教育の手引き2015」を刊行することができた。	91	・専向研は、今年度新たに「メディア機器の使い方」、「見る力を理解する～視覚の視点から～」を企画し、年14回実施した。また、点字基礎研修を45回実施した。視覚障がい教育の基礎的な知識・技能の向上がはかられた。 ・「弱視教育の手引き」は、田中良広先生の助言を受け、修正・点訳作業を終了し、年度内に刊行することができた。 ・「弱視教育の手引き」を活用していくと共に、適宜加除修正部分を蓄積、必要に応じてHP等で発信することで常に活用し得る状態を維持し、次回の改訂に向けて備える。 ・専向研は、研修内容の精選、ローテーションにて検討する。	3. 視覚障がい教育の専門性の向上について ・ライトハウスライブラリーでは昨年7月に眼科医や視能訓練士などと連携してロービジョンケア研究会を開催した。盲学校とも連携して専門性を共に高めたい。 ・医師の立場で視覚障がい者の減少は喜ばしいことである。しかし、高齢者の眼疾患や失明が少なからず存在し、視覚障がい教育の経験の無いものが障がい者になり、ウツなど深刻な状況を生じることがある。こうした点で、健常者にも視覚教育の理解啓発を行うことは大切である。 ・弱視教育の手引き、実践事例集など、本年度の成果・資産を次年度に生かしていただきたい。
	研究部	年4回のグループ研究を行い、「実践事例集」を作成する中で授業力の向上を図ることができた。	76	「実践事例集」の作成にあたっては、年4回のグループ研究を行い、教職員相互の授業実践での工夫・取組について共有することができた。しかし、それぞれの取組を授業実践の中で確認し、その上で協議を重ねることをおこなわなかったため、授業力の向上の実感がもてなかった。今後は、校内研究のテーマとからめながら、授業公開等で参観・協議するなどして授業力の改善を図っていく必要がある。	
	生徒指導部	児童・生徒の実態を踏まえ、実施内容を工夫し、学校・保護者・卒業生・地域が一体となった体育祭や学園祭を実施することができた。	93	今後も児童生徒の実態に応じ、さらに充実させていきたい。地域との連携について今後も検討していき、関わりがもてるようにしたい。	
	小中学部	児童・生徒の興味・関心を活かし、職場実習や校外学習などの体験的な学習や友だちとの関わりをなかで学び合うことのできる合同学習を計画・実践した。	96	集団を活かしたさまざまな合同学習に取り組み、生活経験を広げたり、友達や地域の方などいろいろな人と関わったりすることができた。児童生徒一人一人のねらいや目標を明らかにして、活動内容を検討し、取り組んでいきたい。	
(4)視覚障がい教育の理解啓発を図るとともに、センター的機能の充実を図る。	総務部	作品展などの学校行事について、参加しやすい曜日や内容を考慮することで保護者・関係者の来場が増え、視覚障がい教育の啓発につなげることができた。	91	作品展は昨年度と同じ会場・同じ曜日で実施した。天候にも恵まれ、昨年度より多くの方に来場いただいた。内容も今年度は「点字ブロックの理解・啓発」を新たに盛り込み、来場者の感想からは目標を達成することができたと思われる。作品展の内容については反省を受けて来年度検討したい。	4. その他 ・アンケートの問いかけは何を目的としているか、質問内容がわかりやすいものが良い。 ・アンケートの問いかけの内容はそれぞれ異なるので、当年度の単純な数値比較ではなく、前年度と比較するなど複層的に考えるべきである。
	総務部	学校行事・活動を、適宜ホームページに更新することにより、本校教育活動の情報発信を活発に行うことができた。	74	教職員評価で肯定的意見が8割を切り、また個人意見でも更新時期や周知についてご指摘をいただいた。来年度はより迅速にHPを更新するとともに、HPIについて周知を図りたい。	
	教務部	定期的に視覚補助具の点検を行い、児童生徒・教職員にアンケートをとり、物品の貸し出しや修理、新しい視覚補助具の補充、情報提供をおこなった。	70	毎学期視覚補助具の点検と希望調査を行った。また、壊れたものについては、年度始めに予算計上し、修理、補充を行っている。新しい視覚補助具の補充、情報提供の部分が、業者やライトハウスライブラリーとの窓口が地域支援部となっているため、評価項目と合致していない面があるのではないかと。貸し出しについても、地域支援部を通してのものが殆どであるため、ニーズを把握するのに時間がかかたりすることも評価を下げている可能性がある。改善策としては、評価項目の「新しい視覚補助具の補充、情報提供」を削除したい。あるいは、授業に使う視覚補助具だけに限定した評価項目に変更したい。	
	地域支援部	2名体制の相談活動を行い、月曜5限に地域支援部内でケース検討会を開催し、本年度の教育相談活動を組織的に行うことができた。	83	初めて盲学校の相談業務に当たる教員が半数であったため、二人体制で初回相談を行うことが必要であった。アセスメント結果の分析について複数で検討することで、より客観的で妥当なお伝えになったと思われる。組織で行うことで活動が透明化し、専門性が共有できた。お伝えに関しては後半は1名で担い、旅費や時間の軽減に努めた。	
	地域支援部	年2回の合同ひよこ、夏期休業中のつばさサマースクールを開催し、関係者が交流できる場を設け、互いのつながりを形成・維持していくことができた。	89	合同ひよこは夏期が4家族12名、冬期が6家族24名と大勢の参加者を得た。特に冬期は祝日に行ったために家族の参加も多かったが、会場の問題もあり今後の開催の仕方については検討したい。つばさサマースクールは3組の参加を得、ひよこ同様他学部教員の協力も得て実施できた。ひよこ、つばさともに、保護者はつむぎの会からお話を聞く時間を設けることができた。今後はつばさ利用が増えることを考慮し、サマースクールだけでなく交流学習の実施を検討していきたい。	
	事務部	予算が厳しい状況の中で、経費削減意識を高めながら、一方で、校内の安全や教職員の健康を考慮し、快適な職場環境のために、適切な予算執行を行った。	89	予算にシーリングがかかる中、必要なものに優先順位を付けて対応した。今年度は、バリアフリー関連で特別に予算が付き、寄宿舎の浴室改修および、理療科実習室2室にエアコンを設置することが出来た。次年度も、限られた予算の中で、現場の必要性を考慮しながら適正に対応したい。	
	事務部	学校の窓口として、外来者の受付業務、電話応対等、心配りのある対応を行った。	85	電話応対や受付窓口での業務は、学校の第一印象を決める重要なものであり、県民にとっては学校全体の評価に関わることである。このことを十分に認識し、相手の立場に立った丁寧な対応を心がけ、また、処置に遅れることがないように対応に努めることができた。	
	管理職	中盲連、中四盲体、110周年記念事業の準備、開催に際し、教職員が動きやすい態勢作りにも、組織の円滑な運営につながるよう心がけた。	89	行事の多い年であり、生徒指導部、総務部等の分掌については、例年以上に多忙な年であった。各種行事については教職員全員で取り組んでいただいたが、準備段階で特定の方に大きな負担があったように思う。次年度は、改めて組織で取り組むための体制の見直しを図りたい。	
(5)進路保障を柱にした人権・同和教育の推進を図る。	人権同和教育	授業や学校行事、学校生活、寄宿舎の指導の中で児童生徒の「居場所づくり」「絆づくり」が意識され、同時に、職場でも互いの違いを認め合い、相手を思いやる学校づくりに努めた。	85	教職員研修会やミニ研修、情報の回覧を通して、人権・同和教育に関するさまざまな課題を教職員全員で共有するとともに、集団及び個人の人権感覚、人権意識の向上に努めた。次年度は、ミニ研修等の内容を充実させるとともに、本校のニーズや教職員の意見を集約し、他校の例も参考にしながら、教職員全員が共通認識をもち振り返りを行うことができるための「教職員の心得(仮称)」の作成を検討したい。	